

文化

花と子ども の画家

いわさきちひろ
生誕100年

ちひろは人民新聞を辞め、絵筆一本の生活に入る決意をした。しかし、それは容易なことではなかった。記者時代から、平和運動や婦人運動の出版物にカットや挿絵を描く仕事はしていたが、仕事を増やさなければ生活は成り立たない。芸術学校や記者時代に築いた人脈を頼りに、必死に仕事の注文を取って回った。

松本善明との出会い

松本 猛 ⑬



「夫を寝る 善明」1950年(ちひろ美術館所蔵)

積極的なアプローチ受け結婚

映り、親身になって仕事を世話する男性が何人も現れた。彼らの中でちひろは童女と呼ばれ

「ちひろさんに手を出さない会」というようなものまでできたら、自分は絵と結婚するといつて、男性には興味を示さなかった。

1949年は連合国軍総司令部(GHQ)の日本占領政策が転換した年だった。それまでは徹底した平和、民主主義国家の建設を目指し、憲法制定をはじめ、財閥解体、農地改革、教育制度、労働組合法、婦人参政権制定などを推進してきた。しかし、米国とソ連との冷戦悪化や中国共産党が国民党に勝利したことなどから、日本を反共の防波堤と位置付けることになり、最高司令官マッカーサーは共産党や労働組合の弾圧に乗り出した。権力が仕組んだフレームアップ事件といわれる三鷹、下山、松川の各事件はそのよう

な状況の中で起こった。

ちょうどその頃、ちひろは共産党の会議で23歳の青年、松本善明と出会う。善明は海軍兵学校出身で、戦後東大法学部を卒業し、共産党国会議員団の秘書をしていた。ちひろは、善明が松川事件などを事実と推測を分けて説明する態度や、一生お金をもうける仕事にはつかないつもりだという姿勢に好感を持つ。一方、善明は、当初ちひろが自分より年下だと思い、作ってくれたサンドイッチの味にも引かれ、積極的にアプローチする。善明は出会ってから2カ月余りでプロポーズし、ちひろは年の差にちゅうちょしながらも承諾の返事をする。

この絵は結婚して3カ月半ほどの善明の寝姿である。達者な線のむこうに、若き夫を見つめるまなざしが感じられる。

〈土曜日に掲載します〉
(美術評論家)